



TITLE:

# [紹介] アメリカにおける中國古典詩の研究：一九六二年から一九九六年まで 第一部(上)

AUTHOR(S):

ニイハウザー・Jr, ウィリアム・H; 川合, 康三

---

CITATION:

ニイハウザー・Jr, ウィリアム・H ...[et al]. [紹介] アメリカにおける中國古典詩の研究：一九六二年から一九九六年まで 第一部(上). 中國文學報 1997, 55: 152-176

ISSUE DATE:

1997-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/177801>

RIGHT:

## 紹介

アメリカにおける中國古典詩の研究

——一九六二年から一九九六年まで—— 第一部(上)

ウィリアム・H・ニイハウザー・Jr

ウイスコンシン大學

### I はじめに——範圍の設定

西歐における中國古典詩の研究を概観するようにと最初に言われた時、私はまるで洪水を待つノアの心境であった。實際、書物の氾濫に浸され、少なくとも四十日間の晝夜にわたって論文の大雨を浴びたのであった。神の介入もほとんど希望がないままに、範圍を限定することだけが私の唯一の救いであった。

それゆえ、私はまず、この概観を中國古典詩のアメリカにおける研究に限ろうと思う。この分野のフランス、ドイツの研究の多くを讀もうとし、そして特にイギリス、カナ

ダ、オーストラリアの人たちの研究に頼ろうとしたけれども、これら重要な中國學界への貢獻について、私の知識は不完全なものである。さらに、それ以外のいくつかのヨーロッパの國——イタリア、オランダ、ポーランド、ロシアなど——の學者がこの問題について重要な仕事をしているのだが、私には言葉を解する力もなく、その研究を入手することすらできないので、アメリカに在住している人々と、アメリカで出版された外國人の書いたものに限るのが最善の道であろう。

次に、まれに例外はあるものの、この概観を著作と論文に限定しようと思う。英語に翻譯されたものについては、この雜誌の讀者にはさして興味がないだろうから、ほとんど取り上げない。

最後に、時期の範圍の問題がある。一九六〇年代半ばに中國詩の勉強を始めた者として、私や友人に最も大きな影響を与えた劉若愚 James J. Y. Liu (一九二六—一九八六) の『中國詩の技法』<sup>(譯註一)</sup> “The Art of Chinese Poetry” (Chicago: University of Chicago Press, 1962) が頭に浮かぶ。しかし、

この出発点は個人的な年代以上の意味を伴っている。私はほかの論文のなかで一九四七年から一九六〇年までをアメリカにおける「中國文學の創始者たち」の時期と呼んだことがある。<sup>①</sup>その創始者とは、カリフォルニア大學のピーター・ブッドバーグ Peter Boodberg (1903-1972) と、すでに古稀を越えていたハーバード大學のジェームス・ロバート・ハイトワ― James Robert Highower であると私は思う。この二人は偉大な學者であり、中國文學研究に大きな貢獻を成したのではあるが、一九六〇年代初期においては中國詩の研究は中國史の研究に比べて遙かに遅れていたのである。<sup>②</sup>

しかしこの時期、一九四九年の中華人民共和國成立とともにアメリカに移住したかなりの數の中國人亡命學者が、學界に登場し始めていた。彼らの多くはアメリカの大學で西歐の文學を學び、Ph.D. を取得し、東アジアの言語・文學の新學部を設立しつつあった。これに關連して何人かの學者の名前を擧げることができるが、夏志清 (C. T. Hsia) と劉若愚が「批評」のこの新しい時代を最もよく代表する

だろう。中國文學研究の次の世代を支配したのは、彼らとその門下の學問であつた。そして中國古典詩の領域においては、歴史的研究所と文學的研究の間の不均衡を改めたのは、劉若愚の最初の英語の著作、『中國詩の技法』であつた。こうした理由から、この本と一九六二年という年は、記述を始めるのに適切な時點と思われる。

私の概観は二つの部分に分かれる。(一)『中國詩の技法』のような「詩の一般的な研究」、(二)「個別的な詩人や詩作品の研究」。全體として、私は批評するのではなく、論文内容の要旨を中心に記そうとした。いっそう徹底した評價については、付録のリスト「中國古典詩に關する主要著作・論文、一九六二—一九九六、I：詩の一般的研究」のなかの書評を見られたい。  
(譯注)

## II 詩の一般的研究

劉若愚は『中國詩の技法』を「『世界』とことばの二重の探求としての詩の理論」のスケッチとして敘述している。<sup>④</sup>その本は「いかに中國詩に批評論的に接近すべきか」(xi:

頁」という基本的な問いに對して答えようと試みたものだ。それは書評の一つが記しているように「從來無視されてきた」⑤問題である。この本は三つの部分に分かれている。

(1) 詩的表現の手段としての中國のことば。劉若愚はそれが主として情報を提供するという。(2) 詩についてのいくつかの傳統的な見方。そのなかで過去の解釋に對する彼の解釋を述べ、中國の文學批評に四つの基本的な流れを認めている。(3) 統合に向けて。ここで劉は古典詩を読む彼自身の方法と、それが傳統的批評に基づいていることを語っている。第一の部分のなかでは、五つの章それぞれに興味深く重要なものではあるが、五番目の「中國の觀念と考え方・感じ方の方」の章が、中國詩を學ぶ西歐の學生にとって最も有益な議論である。この章は中國詩の七つの基本的な觀念を扱っている。自然、時間、歴史、閑適、望郷、愛、飲酒、である。これは我々自身の觀念とは異なる中國の觀念を紹介するのみならず、以下に記すであろうように、のちの研究に對して重要な問題を明らかにしている。たとえば「歴史」は、中國詩の多くにおいて歴史に對

して強い意識があることを指摘するだけでなく、ハンス・フランケルの「唐詩における過去の瞑想」(後述)を觸發したものであった。「飲酒」は中國の詩のなかに繰り返して「醉」があらわれても、それは中國の詩人がアルコール中毒であるわけではないと西歐の讀者に注意するものであった。劉は「醉」を「飲酒」と譯すことを主張している。

詩は「世界とことばの解釋である」という理論から、劉は「すぐれた詩」とは新たな世界を開くものだという結論を導き出した。このような觀點は李白(七〇一—七六二)とか李商隱(八二—八五八)のような詩人に對して過度な評價を與える危険をもつ(劉若愚がのちに李商隱を研究した理由の一つに違いない)ものの、少なくとも西洋の學生に對して最初の枠組みを與えたのであった。

(第三章の)「イメージとシンボリズム」もまた新たな面を開き、そして影響を與えたものである。そこには詩のさまざまな問題についての西歐の觀念をどのように中國の文脈に適合させるかに關する劉の理論が含まれ、『詩經』の「靜女」(毛詩註疏)は個人的な愛の歌である(二〇四—一

〇六頁）というような、すぐれた緻密な讀みの例が提供されている。

しかしその本は議論を提起したかたちの結論で閉じられている——「中國詩の大多數は、さまざまな時代に書かれたにもかかわらず、中國の讀者にとつて同時性をもつということをも、西歐の讀者は思い起こすべきだ。……實際のところ、中國の讀者の多くは、唐代の詩人に對して、たとえば明代の詩人よりも、はるかに親近感を覺えるのだ」と劉は注意を喚起するのである。劉がこの本を書き始めた問題、「いかにして中國詩に批評論的に接近すべきか」という問いに答えようとすると、西歐の讀者は劉の頭のなかにある元の詩からずっと離れてしまっている自分に氣づく。この本は若い西歐の研究者に多くの着想を與え、劉若愚をアメリカにおける中國古典詩研究の最前線に押し出した、獨創的な仕事である一方、アメリカの讀者に挑戦狀を突きつけたのはこの結論であつた。それに答えた最初のものは、この本に對する多くの書評であるが、そのなかでジェームズ・R・ハイトワ― James R. Hightower の書評にまざる

紹介

ものはなく、彼はかなり積極的に評價したあとで、「中國詩の世界を『翻譯で』開拓しようとする人たちも含めて」この本を推薦している。

その讀者の一人は、疑いなく、バートン・ワトソン Burton Watson であつた。ワトソンはその膨大な翻譯が最も知られているけれども、彼の學問的な研究には我々の注意に値するものがある。『初期の中國の文學』“*Early Chinese Literature*” (New York: Columbia University Press, 1962) が最上のもので、それは英語で書かれた完全な中國文學史が今日でも欠乏している中であつて、いまだに有用である。それは「東洋の思想と文學を學ぶ一連の手引き」(ウィリアム・テオドル・ドベリ William Theodore de Bary 「前言」)の最初のものである。私の考へでは、それは今日でも最もすぐれたものの一つである。ワトソンは「歴史」(一七一―二〇頁)、「哲學」(二二―一九八頁)のあとで「詩」(一九九―二九四頁)を扱っている。初期の中國詩についての全體的な評價は、率直で多くの知見を與えてくれる。

ことに古代ギリシャやインドと比較してみると、古代中國の詩の量はかなり少なく、初期の文學的傳統における位置も相對的に小さいものであつた。しかしそれにもかかわらず、その本質的な價值ははなはだ大きなものであり、その重要性、影響力もかなりのものであつた（二〇一頁）。

ワトソンは彼自身の多くの翻譯によつてふくらませながら、『詩經』の内容とことばをみごとに要約している（二〇二—二三〇頁）。しかし『楚辭』については彼はそれほど氣に入っていないことは明らかだ（二三二—二五四頁）。そこに認められる「詩のいくつかの相」は「理解を妨げる」ものの、すなわち詩人の「見苦しい自尊心」であり、ワトソンの頭のなかでは「かくも花束の荷を負わされた中國の紳士」という、意圖しない滑稽さのイメージを生み出す、至るところに出てくる植物のイメージであり、そして最後に「詩を支配している挫折と絶望の救いたい氣分」（二三九頁）である。宋代の詩人の簡潔さに對するワトソンの好み、そしてまたその作品の翻譯の成功は、裝飾的な楚の悲

歌に面した時に彼が感じる不滿をつのらせたに違いない。歌と歌謠の章（二八五—二九二頁）は、『史記』と『漢書』のなかに傳えられている作品に焦點をあてている。それは現在でも、この忘れられた資料についての重要な記述であり續けている。

柳無忌の『中國文學入門』“*Introduction to Chinese Literature*” (Bloomington: Indiana University Press, 1965) は、ワトソンの文學史に踵を接して登場した。この書物は今では三十年以上昔のものになったが、それでもワトソンに對するすぐれた補充であり續けている。明らかに時代遅れになつたこの『入門』（特に詩についての部分）は早期のことばと文學についてのものであるからである。

この本は柳教授の「中國文學史」の授業から生まれたものである（私もその出席者であつた）。この開拓者の仕事の前には、英語で書かれた手ごろな教科書がなかった。授業は大きなトピックをめぐつて組み立てられていた。學生は元のテキストの翻譯を讀むことを求められ、柳教授はそれらのテキストを解釋した。この本もそれと似ている。「序

文」(VII頁)のなかで柳教授はこう述べている。「私の目的は中國の文學にながしかの興味を抱いている西歐の讀者の必要に應えることである。(私が)重點を置いたのは、大作家、有名な作品である。」この本に取り上げられた中國古典文學の十七の大作家と作品(最後の章は近代文學を扱っている)のうち、八つが詩を含んでいる。第一章「中國のことばの曙から詩の古典まで」(九—二三頁)、第二章「屈原、中國詩の父」(二四—三四頁)、第四章「漢代の文學」(樂府、初期の五言詩、賦を含む、四五—五八頁)、第五章「古體詩と近體詩」(五九—六八頁)、第六章「偉大な唐詩」(六九—八七頁)、第七章「晚唐詩」(八八—一〇〇頁)、第八章「詞の起源と開花」(一〇一—一二四頁)、そして第十三章「散曲、新しい詩のメロディー」(一二五—一九四頁)<sup>①</sup>、である。

この本のなかの多くの詩の譯は——すべて著者自身によって譯されたものだが——、それぞれの詩を適切にあらわしているようにみえる。杜甫については、「兵車行」、「石壕吏」、「月夜」、「茅屋爲秋風所破歌」、そして二、三の長

紹介

い詩の一部が見られる。柳教授の基本的な主張と評價は今もなお妥當である。彼は『詩經』が後世の詩に對して韻律のうえでもテーマのうえでもモデルであると論じ、それを説明している(第一章)。彼は陶潛とかその他の中國の文人たちが酒好きであつたことに對しても(劉若愚を含めて多くの近代の中國の學者とは對照的に)理解があり、文學のなかで飲酒のもつ役割に對して説得力のある分析をしている。

「陶潛が習慣的に、非常に愛したのは、酒であつた。……この弱點は彼の長所に轉換した。……一人で飲む時には喜びを與えるものであつたが、友人や近所の人たちと杯を酌み交わす時には仲間意識を與え、それもまた彼の詩にインスピレーションを與えたのである。」(六二頁)柳教授は現代における文學的名聲と詩人がその時代に受けた評價との差異を忘れていない。「陶潛は彼の時代にはほとんど影響を引き起こさなかつた。」(六四頁)少なからぬ點において、彼は大膽である。杜甫(七二—七七〇)よりも李白を明らかに好んでいる。「蜀道難」について、「自然の荒々しく強大なこの景觀は、中國の詩のどこにもほとんど見られない

ものだ」(七九頁)と彼は書く。そしてまた「李白が中國の詩人のなかで最もよく知られているのに對して、杜甫は批評家から最も偉大な詩人とみなされている。しかしながらその評價は、中國の學者たちが李白のロマンティックな放縱さよりも杜甫の道德的な高潔さを、李白の自然さよりも杜甫の藝術的技巧を偏愛することによって重みを與えられている」(八六頁)同様に、彼は詩は盛唐の終わりに絶頂に達したと主張している(八六頁)。

それにもかかわらず、柳教授は續く章のなかで白居易、李賀、李商隱の詩に對して賢明な手助けを提供している。

「蘇軾は……韻律における用心深い、間違いを犯さない正確さよりも、ことばと感情の美しさを高く價值づけた眞の詩人であった」(二〇九頁)と書く時、杜甫の藝術的技巧に對する先の賞賛は弱まっている。

晩唐詩についての議論としては、A・C・グラハム A. C. Graham の『晩唐の詩』*Poems of the Late T'ang* (Baltimore and Harmondsworth: Penguin, 1965) を想起しなくてはならない。この概觀のなかにグラハムの本を含める

ことには、二つの反對意見が起るかも知れない。第一に、彼の仕事は翻譯を集めたものであつて、英語を母國語としない讀者にとつてはさほど興味がもてないものだ、という點である。第二は、翻譯者はアメリカ人でなく、イギリス人であることだ。しかしこの本は英國とアメリカで(共同で)出版され、アメリカの書店でもちゃんと手に入るもので、一九六〇年代後半以後におけるアメリカの中國詩研究と強く結びついているので、私はそれを含めることに決めたのだ。グラハムは「序言」のなかでそのように示唆している。

この本は數年前、劉若愚と交わした話に多くを負っている。彼は私に李商隱の詩や、エンブソン以後の批評の技法を晩唐詩に適用することができること、そして杜甫の最後の詩のなかに九世紀の方法の源があることを教えてくれた。

最初に考へうる反論はというと、「晩唐詩」の研究のなかに、杜甫、孟郊(七五一—八一四)、韓愈(七六八—八二四)、李賀を含めてしまうために、この本が傳統的な時期



區分に對する批判になつてしまふことである。グラハムはどのように詩人を選んだかについてのみならず、そのすぐれた序文（二三—三七頁）において、これらの詩人の作品のなかで「ことばとイマジネーションがますます複雑になつてゐること」が「ウィリアム・エンプソンによつて讀み方を導かれた讀者にとつて彼らを最も興味深い中國の詩人にしてゐる」（一九—二〇頁）と論じてゐる。グラハムは彼が盛唐詩の「ロマンティズム」と呼ぶもの（李白のような詩人にみられる）に對する反發が、杜甫の夔州以後の詩から始まつてゐると考へてゐる。この方向が晩唐詩人を中國のことばの「力の限界まで」（二三頁）探求させることになつた。この展開を説明するために彼は杜甫の「秋興」詩第一首のなかの二句を使つてゐるのだが、興味深いことに、同じ連作詩が一、二年後に二人の若い學者、梅祖麟と高友工を惹きつけることになつた。梅と高に與えた明らかな影響（すぐ以下に述べる）や上述の劉若愚からの影響は別にしても、グラハムが彼に續く研究者たち、チャールズ・ハートマン、Charles Hartman、スティープン・オウウェン

Stephen Owen、そして劉若愚本人にインパクトを與えたのは明らかである。<sup>⑩</sup>

引喩についてのグラハムの短い論述は、それがこの時代の詩においていかに重要であるかだけでなく、それを翻譯、注釋に組み込むことがいかに困難であるかも強調してゐる。同じイメージをもつ、様々な時代の中國の詩を翻譯したアンソロジーを編もうという彼の提案は獨創的なもので（二九頁）、それはハンス・フランケルの『花咲くブラムと宮廷の女性』（後述）などの作品に結實したものだ。グラハムはまた中國の詩人の個性、個人的な文體を翻譯を通してあらわすことのむずかしさを指摘してゐる。そうしようとする彼自身の試みは、これら「晩唐詩人」の間で違ひがあると彼が考へてゐる、「イメージの型」を明らかにすることに集中してゐる。特に、この選集の目的は、「直喩と隱喩における展開の過程を跡づけること」（三六頁）であるが、それは「直喩から複雑な隱喩へ——杜甫の「江漢」「秋興」から、韓愈の「南山」、李賀の「浩歌」を經過し、李商隱の「無題」「錦瑟」に至る翻譯を通して」ということにな

ろう。複雑なイメージに對するこの偏愛は、白居易のような詩人を除外することになった。グラハムは白居易を「九世紀の様式」に合わないものと見ているようだ。<sup>13)</sup>

梅祖麟と高友工の「杜甫の『秋興』——言語的批評の實踐」*“Tu Fu's Autumn Meditations”* (Harvard Journal of Asiatic Studies <以下HJASと略す> 28 (1968) 44-88) は杜甫の詩の研究としてみる事ができ、したがって本稿の第二部にまわされるべきものだが、それ以上に、唐の律詩について梅と高がHJASに寄稿した三篇の輝かしい論文(第二篇は一九七一年、第三篇は一九七八年に世に出たもので、いずれも後述<sup>3)</sup>)とみなすのが適當である。A・C・グラハムの『晩唐の詩』の影響もはつきりしている(グラハムの一連の翻譯は、この研究のための基本となる譯である)。

最初の論文の主題は、杜甫が七六六年に書いた「秋興」と題する八首の連作である。しかし論文のテーマは、中國の詩に近づくためには、劉若愚やその他の學者がそれまでに示したよりもっといい方法——言語的な原理に基づいて読むこと——があるということである。この論考で提供

された解釋の價值を高めているのは、梅と高が導入した傳統的な學問のバックグラウンドである。八首の詩における音聲的なパターン、リズムの多様性、文法的な曖昧さ、複雑なイメージ、言い回しの不一致などに加えて、テキストに關連する傳統的な注釋も導入した。

梅と高はウィリアム・エンプソン(北京において劉若愚の先生であり、A・C・グラハムにも影響した)、I・A・リチャーズ、ノースラップ・フライの影響を認めている。しかし二人がここで提示している方法は、高度にオリジナルなものである。本稿のような概觀は、彼らの分析を詳細に述べる場所ではない。これらの詩を一語一語正確な言語的な基準に基づいて分析した注意深さは、その結果、中國古典詩を翻譯するほとんどすべてのアメリカ人の方法に革命を起こしたと言っておこう。

梅と高が言語的批評がいかに唐の律詩に適用できるかの獨創的な研究を出版したのと同じ年(一九六八年)に、周策縱はのちに二卷となる『文林——中國の人間性の研究』*“Wen-Lin, Studies in the Chinese Humanities”* (Madison, Wis-

consin: University of Wisconsin Press) の第一巻を編集した。周はそれまで實現されたことのなかった中國の人間性の研究を育成する手だてとしてそのシリーズを出版したいと願っていたのだが、この最初の一卷はA・R・デイヴィスA. R. Davis、ジェイムス・R・ハイタワー、劉若愚、ヘルムート・ヴィルヘルム Hellmut Wilhelm、そして周自身などのような著名な學者による、古典詩に關する七つの論考を収めている點で重要である。

周の『文林』があらわれた二年後に、ウイスコンシン大學における彼の同僚、ウェイン・シュレップ Wayne Schlepp が『散曲——その技法とイメージ』"San-Chu, Its Technique and Imagery" (Madison, Wisconsin: University of Wisconsin Press, 1970) を出版した。この小さな本は、散曲と呼ばれる歌を西歐の讀者に説明するために書かれている。その様式は初期のモンゴル支配の時期における北方中國の民歌から起こったものである。その本の第一章から第五章のなかで、シュレップはこのジャンルにおける韻律、押韻、母音と子音の型、反復、會話のかたちをみつとに分

析している。しかしシュレップが最もすぐれた思考を示しているのは、その序文である。そこで彼は中國の詩型のなかの傳統的な一般的區別はジャンルが單にラベルによつて決められ、そのラベルは生まれてから長い時間ののちに與えられるものであるので、無効であると論じている。シュレップはジャンルは(第一章から第五章のように)その詩的な工夫の分析を通して決められ歴史のなかに置かれる方がよいと考えている。彼は文體のレベルというものも考慮しなくてはならないということを指摘して、中國の詩のそれぞれの形は先行するジャンルから直線的に降りてきたものだ(曲は詞から、詞は詩から)という觀念を攻撃する。たとえば、曲は詞がエリートたちの社會で書かれていた同じ時代に、大衆的なかたちとして存在していたかも知れない。英語において次の中國文學史が現れる時にはシュレップの考えが取り入れられることが望まれる。

翌年(一九七一年)には梅・高の唐の律詩に關する進行中の仕事の第二の分冊「シンタククス、語法、イメージ」"Syntax, Diction and Imagery" (HJAS 31 (1971) 49-136頁)

が出された。或る意味で、梅と高の「シンタックス……」論文は後退である。「杜甫の『秋興』」のなかにおいて、彼らは言語學的な理論を批評の實踐に應用したのだった。この「シンタックス……」においては、方法論の實踐に理論的な基礎を與えはじめた。その論文は杜甫の「江漢」を序論で讀むことから始まり（四九—六三頁。「杜甫の『秋興』」のなかでグラハムの「秋興」の譯を用いたように、グラハムの翻譯を使いながら）、そこで彼らの理論の可能性を説明するところが意圖されている。「名詞と單純なイメージ」（六三—九四頁）、「動詞とダイナミックなイメージ」（九五—一二〇頁）、そして最後に「陳述と統合されたシンタックス」（一二〇—一三五頁）に至る。著者たちは最も基本的なレベルにおいてシンタックスだけを扱うと述べてはいるものの、實際にはその論文の最後には律詩の典型的な構造を記述している。「texture」（統語論的に關係しているのではなく、語のその場における相互作用）のようなことばを定義したあと、今體詩を事物よりも性質に向かうイメージを伴うて、簡潔、濃密、曖昧、シンタックスにおいては弱く、テクスチュアに

においては強いものとして分類した。彼らは單純なイメージ、ダイナミックなイメージ、想像的なことば、陳述的なことばの多くの例を擧げている。梅と高は王維（七〇—七六）の次の句のように、今體詩の句をいつも條件と結果を構成しているものとみなしてもいる。

條件      結果      條件      結果

主體／行動      主體／行動

日落      江湖白、      潮來      天地青。

彼らは私が一つのかたちに合併しようとする規範的な構造を説明するために、いくつか圖表を提供している。

第一聯—第三聯      第四聯

ことば      想像的      敘述的

平敘法      他の法（願望、疑問）

求心的力      遠心的力

シンタックス      非連續的（並置）      連續的（統語論的統一）

讀者の反應      感覺的（想像）      知的（理解）

空間／時間

絶對的

相對的

句の主體

非人格的

詩人

梅と高が例として用いた杜甫の「江漢」の二つの聯は、パラディグムの適當性を説明することができる。第二聯はいう、

片雲天共遠、永夜月同孤

グラハムの譯では、

あのひとすじの雲ほどに遠い空のもとで、

終わりのない夜の月はもはや孤獨ではない。

ここでのことばは明らかに想像的である。シンタクスは孤立している——「ひとすじの雲」と「空」の間の関係も、「終わりのない夜」と「分け持つ」〔同〕。グラハムの譯では「孤」とあわせて「もはや一人ではない」に包含されている）の關係も、完全に明晰ではない。その句の意味は「ひとすじの雲は空のように遠い」ということなのか？ 或いは「空の下で、私はひとすじの雲と同じくらい（家から）遠く離れている」ということなのか？ 次の句の意味は、「終わりのない夜が月と孤獨をともしている」というこ

紹介

となのか？ 或いは「終わりのない夜、月と私が孤獨をともしている」ことなのか？ この聯の全體的な効果、

——孤立としかるべき場所にいないこと——は弱い統語とその結果として生じる曖昧さを通して達成され、「片」と「孤」、「遠」と「孤」、或いは「月」と「遠」のような語の間のテクスチュアの關係（一般的な求心的な讀み方の一部として）によつて高められている。空間も時間もここでは絶對的であり、詩人は、ほのめかされているものの、不在である。

最後の聯にはいう、

古來存老馬、不必取長途。

グラハムの譯では、

年老いた馬を飼つておく場所はいつもある。

もはや長い道に就くことはできなくても。

ここでは統語が支配している。二句の主體は老馬であり、ここでは詩人を象徴している。ここにイメージはない。知性に訴える力は、管仲が或る冬、北方の征戦から戻る際に道に迷った（失道）という話（『韓非子』の「説林」の章に

記録されているのだが、梅・高は引いていない）を引用することによって強められる。管仲は老馬を放し、そのあとについていて、道を見つけた（「得道」）のである。老馬はここでは杜甫をあらわし、詩人は彼自身のようなおいはれ馬ですら唐の治世を助けることができるのだと論じ、最後の句が指しているのは、馬の力不足（グラハムの「もはや……できない」）でなく、馬が長い道を避けることのできる老練さである。老いた馬は北方への長い遠征のちに、唐王朝（とその君主）が「得道」——適切な道を見つけるのを助けることができるのである。

梅・高は最後の聯も始めの三つの聯の想像的な「世界」を末二句に主張されている「自我」に結びつけていること（劉若愚の術語に同意しながら）述べてその研究を閉じている。しかしながら彼らはこの詩のもう一つの陳述的な部分を無視している。それは「江漢」という詩題であり、それは最後の聯の陳述的な枠を基づかせ、抽象的なイメージ、真ん中の聯の明らかな客體、そしてそれを取り巻く（詩題と最後の聯で）主體的な言明の間の結びつきを強める可能

性を提供している。著者たちはまた今體詩において明言的な動詞が稀であるのは、「隱喩は数え切れないほどだが、直喩はめったにない」（一〇三頁）ことの理由であると論じている。今體詩が晩唐においては規範となったために、この主張は唐詩のイメージは盛唐以後、いつそう複雑になったというA・C・グラハムの意見（上述の『晩唐詩』の議論を参照）に明らかに連なっている。この豊かな研究は、有益な新しい術語を提供した。さらに、それが實踐批評に對する理論的な基礎を意圖しているために、梅・高の今體詩の規範的構造は唐詩の翻譯を計る標準として有益であるべきだ。二人の最初の論文のように、この論文もアメリカにおける唐詩研究者のほとんどすべてに受け入れられ、讀まれたのである。

同様に強い影響を與えたのは、梅・高の「シンタックス……」と同じ號のH. J. A. S. (31 (1971): 5-27) に載ったジェームズ・R・ハイタワの「陶潛の詩における引用」である。この論文のなかでハイタワは、「引用を構成しているのは何か」という、基本的ではあるが、重要な問い

を投げかけている（五頁）。彼は過度に意識的な解釋、つまりあらゆる句の背後に引用を讀みとる「知識のありすぎる讀者」に對して警告を發している。そして陶潛の全部の詩を注意深く讀んだあとで、七つのタイプの引用を抽出する。（一）典故が詩の主題であり、典故を知らない詩が理解できないもの。（二）典故が一つの句を理解するため鍵となるもの。（三）一句の意味は理解できるが、文脈のなかでは理解できず、典故が理解できはじめてその句が文脈に適合するもの。（四）一句の意味は理解できるが、典故が分かるとその句の本來の意味が強化されるもの。（五）一句のなかで用いられた表現が詩人がよく知っているにちがいない他の本のなかにも見られるが、しかしその句や詩を讀むうえで役には立たないもの。（六）古典のなかからよく知られた意味で用いられる語。（七）印刷されると思いがけない、紛らわしい類似が生まれるもの。（六―七頁）實際のところ、あとの三つの種類は「典故」ではないように見える。梅・高のちに第一のタイプを「全體的な典故」、第二のタイプを「部分的な典故」と言い換え

ている（以下に述べる「意味、メタファー、典故」のなかの論を参照）。私は第三のタイプは「保留された典故」、第四のタイプは「調和的な典故」とそれぞれ名付けたらいいと思う。この論文は、『唐代の展望』（後述）のなかのデイヴィッド・ラティモアの論文と梅・高の一九七八年の論文とともに、古典詩における典故をいかに扱うかという方法論の基礎を明らかにしている。

討論をまとめた論文集、『唐代の展望』“*Perspectives on the T'ang*” (New Haven and London: Yale University Press, 1973) は、アーサー・F・ライト Arthur F. Wright とデニス・トゥイッチット Denis Twitchett によって編集され、一九七〇年代初期における唐代研究の、最もすぐれた、輝かしい學者たちの仕事を集めたものである。そのなかで三篇が唐詩を扱っている。（一）ハンス・H・フランケル Hans H. Frankel は「唐詩における過去の熟視」（三四五―三六五頁）のなかで、高い場所に登ることと過去を振り返ることが結びついていることを掘り起こした。彼はこの「トpos」のなかに五つの要素を認めている。一、高い場

所に登ること。二、遠くを眺めて過去を知覺すること。三、人間の無常と山川の永遠との對比。四、歴史的人物や遺跡の引喩。五、涙。そして彼はトポスがいかに働いているかを陳子昂（六六一—七〇二）と杜甫の二つの連作詩の翻譯のなかで説明している。

エリング・O・エイド Elling O. Eide の「李白について」（三六七—四〇三頁）は、李白の學の欠如を（とりわけ同時代人、杜甫と比較しながら）指摘する。李白の「自然な詩」は注意深く作られたものではなく、「夢遊天姥別東魯諸公」、「廬山謠寄盧侍御虛舟」、「天馬歌」、「對酒」の四首の詩の翻譯のなかに彼自身のトルコ語とトルコの文化の知識を織り込んでいる。エイドはまたジェームズ・ハイタワーと同様、典故の存在をどのように決めるかということに關心をもっている。「（李白の）詩のなかに、もつとよいことばがないが、『きつかけ』と呼べるもの——それに氣付き、『作動』された時には、新しいレベルの意味と、詩のどこかほかの場所に隠されている典故を讀者に注意させる一連の結びつきを始動させる、語呂合わせ、少し妙なシンタックス、

豫期しない語——を見つける時がある」と彼は考えている。術語のほかに、エイドの細かい學識は、この論文を唐詩をきめ細かく讀むためのモデルに高めたのだった。

デイヴィッド・ラティモア David Latimore の「唐詩の典故」（四〇五—四三九頁）は、『展望』のなかから取り上げるべき三番目の、そして最後のものである。主として西歐の讀者に向けられているために、唐詩のなかでは「典故の存在そのものが我々にはわからない」（四〇五頁）という、劉若愚や梅・高とは矛盾する發言がみえる。一方で、ラティモアは「一連の典故」が詩人の「意味の主な筋道」（四〇六頁）を示すのに結びつけられているとも考えている。ラティモアは典故に二つのタイプがあると認めている。

（一）同時代の事件や人や狀況をそれに結びつけられた人場所、物を言うことによって暗示する、時局的な典故。（たとえば、クリントン大統領のファストフード好きがあまりに有名なために、「マクドナルドのナンバーワンのお客」と言うことが彼の名前を思い起こさせるように）

（二）別のテキストの（しばしばよく知られている）句や語をそつとほめめかす



テキスト上での典故。ラティモアは時局的な典故はしばしば共時的に機能し、ほんの短い期間だけ効果を保つ（マクドナルドのナンバーワンのお客）のように、将来の世代の読者にとってはきっと理解されなくなるであろう典故）が、一方、テキスト上の典故は強く通時的に作用すると述べている。テキスト上の典故が効果をもつためには、唐詩の読者が享受できるのと同じように、読者がみな特定の資料の總體をよく知っていることが要求される。ラティモアはそこで李頎（七二五在世）の「琴歌」における典故を例に引いて説明している。上に述べた『展望』の二篇の論文におけるように、ラティモアの典故の研究は、典故というこの複雑な問題について考え方をより深めた点で重要であるが、同時にまた新しい術語を提供して、それによって批評の実践に役立ててもいるのである。

一九七四年に王靖獻の『鈴と太鼓——口承傳統における規範的な詩としての『詩經』』“*The Bell and the Drum, Shih Ching as Formulaic Poetry in an Oral Tradition*” (Berkeley, Los Angeles and London: University of California, 1974) 14

『詩經』を寓意化するこれまでの試みは、テキストをゆがめてしまい、歌と音楽との関係を再構成することのみが、詩の「眞の美」を明らかにできる（一一三頁）と論じて、中國學の世界に衝撃を与えた。ミルマン・パリイ、アルバート・B・ロードのホメロス研究に依據して、王はこの古典的アンソロジーに収められた三百あまりの詩のなかから多くの「ふつうの句」を引き出し、それを「定句」（formulae）と呼ぶが、「定句」とは「似たような韻律的條件のもとで、一定の本質的な考えを表現するために繰り返される、はっきりした意味の單位を形作る三語以上のグループ」（四三頁）のことである。これらの定句は、詩人の記憶装置の部分として、特別なモチーフによって呼び出される（六三頁）。かくして毛詩10「南山」において、王はよるべのない女性というモチーフがほとんど獨占的に定句的なテキストをいかに引き出すかを説明している（六七頁以下）。『詩經』は技法において古典ギリシャや古英詩に匹敵するほどに、鮮明な性格とテーマごとの定句的な構成の豊かな痕跡をもっている（一二八頁）と王は結論づけて

いる。王の研究はシノロジストや、パリー・ロードの門弟からすら反論された(たとえばダヴィッド・E・ビナムの「鈴太鼓、ミルマン・パリーとタイムマシン」〔中國文學・エッセイ、論文、書評〕一・二一九七九年二月、二四一―二五三頁)を参照)が、しかし王の理論に對する完全な評價は今後の研究を待たねばならない。

アメリカ人學者による中國古典詩の一般的な論文として重要なものは、英國の學者とバークレーの教授、シリル・バーチ Cyril Birch によつて編集された『中國文學諸ジャンルの研究』*“Studies in Chinese Literary Genres”* (Berkeley, Los Angeles and London: University of California Press, 1974) にごくつか收められている。陳世驥(一九二―一九七二)の遺作『詩經』——中國文學史と詩におけるその包括的な意味(八―四二頁)は、古典詩における「興」を英語で廣く分析した最初のものである。陳は「興」の要素は——彼は「興」を「モチーフ」と譯している——「歌全體の氣分や雰圍氣」によつて讀者に即座に訴えかける「新鮮な世界」から受け繼がれた「大小の自然物

を呼び起こすことば」と述べる(三三―三三頁)。デイヴィド・ホークスの「女神の探求」(四二―六八頁)は賦の二つの大きなタイプ——惡逆な支配者や殘酷な運命に對する著者の悲しみや不滿を述べる *tristia* と、元々は呪術者のものである、想像的な天界遊行を述べる *itineraria* ——の獨創的で影響力の強い敘述を含んでいる。ハンス・F・フランケルの「樂府詩」(六九―一〇七頁)は、唐代の新樂府は除いて、そのジャンルを起源から探っている。フランケルはこの包括的な術語の傳統的な分類を論じ、それから傳統的に樂府と呼ばれる詩を五つのタイプに分ける(大量の例とともに)彼自身の分類を提示している。(一)漢代の儀式的賛歌。(二)漢王朝の音樂擔當官廳によつて選ばれて音樂を付けられた、作者のわかる作品。(三)漢代の作者不明の歌。(四)六朝の賛歌と一般の歌。(五)文學者によつて書かれた詩。<sup>15)</sup> フランケルは五番目のカテゴリーが「一方では作者不明の樂府から區別され、他方ではふつうの詩から區別される、孤立した藝術様式」になると結論している(一〇四頁)。

言及すべき最後の論文は、劉若愚の「詞の文學的性格」

(一三三—一五三頁)である。北宋の詞に關する彼の本(後述)にいろいろな點で似てはいるが、この論文は詞人のタイプと文學の様式の問題を述べているのが獨自なところである。劉は詞人を四つのタイプに分類している。(一)限られた範圍のテーマ、氣分のために詞を文學様式として用い、自分の作った歌を唱わせて、聞き手の効果に注意を拂う人々(主として唐、五代、宋初期の詩人)。(二)詞を單にもう一つの詩の形式とみなす人々(蘇軾へ一〇三七—一一〇一、辛棄疾へ一一四〇—一二〇七)。(三)詞を主として歌の形式とみなし、音樂的な効果に專念する人々(周邦彥へ一〇五六—一一二二)。(四)宋詞の模倣者(清の詞人)。彼は口語的、優雅、ブキッシュという三つのかたちが優勢であるとみなし、それが一人の詩人によって用いられうると注意している。

劉若愚の『北宋(九六〇—一一二六)の大詞人』"Major Lyricists of the Northern Song, A. D. 960-1126" (Princeton: Princeton University Press, 1974) は、この論文で提起され

た多くの考えを繼續し、英語における詞に關する最初の學術書となっている。劉は文學史を書いているのではないと言うが、彼があまりに頻繁に否定することは、前期後期の詞の歴史を書いている同じ出版社による續く本とともに、彼の仕事は詞の發展のアウトラインを描くことを意圖していたことを示している。劉は彼が北宋を扱うのは、詞が「完全な成熟に達し、重大な詩のジャンルになった」時代であるからだと言っている。(五頁) 彼が選んだ六人の詩人は、「時代を代表し」、この時代の詞に認められる四つの「世界」を典型的に示すと論じる。その四つとは、(章の名前から引けば) (一)「感情と感覺」(晏殊へ九九一—一〇五三と歐陽修へ一〇〇七—一〇七三) (二)「感情的なリアリズム」(柳永へ九八七—一〇五三と秦觀へ一〇四九—一一〇〇)、(三)「知性とウィット」(蘇軾)、(四)「微妙さと洗練」(周邦彥)。「エピソード」のなかで、劉はこの時代における詞の發展においてこれら作者たちの二十八首の詞を丁寧に讀み、他の詩人やその作品についても短い論述をしている。

次の重要な研究もやはり劉若愚によることから、彼が一九六二年から一九七四年に至る時期のアメリカにおける中國古典詩の領域で大きな存在、學者であつたことが明らかになる。劉若愚の短い考察、「西洋における中國文學研究——最近の發展、現在の傾向、將來の展望」(H. J. A. S. 35 (1975), 21-30頁) という劉若愚の目を通してこの時代に

接近するのがふさわしい。劉の概観は中國古典詩研究について我々が見てきた上に加えるものはほとんどないが、一つの時代の終わりを締めくくる助けにはなる。彼はこう書いている(二二頁)、「今日、中國文學研究を全體的に概観することは、一本の論文のスペースではまず不可能である」と書き、一九六二年にこの領域で出版された十五冊の本、一九七一年の五〇冊の本の文獻リストを付けている。A・C・グラハムの『晩唐の詩人たち』を「廣く知られた翻譯」と言っていること(二四頁)、梅・高の「杜甫の秋興詩」と「唐詩におけるシNTAX、語法、イメージ」について「ことばの分析を強調した研究の……有名な例」と言っていること(二七頁)は、これらの研究に劉が影響を

與えたと先に推測したことを裏付けている。劉の概観は、實際、自分と自分の學生たちが刊行したものとよつて占められている。そのようにして、この概観は中國古典詩の最高の「母國語の讀者」とその門弟たちの學風を反映している。

もし劉若愚が概観を書くのが一年遅れて、『ひまわりの輝き——三千年の中國詩』“*Sunflower Splendor, Three Thousand Years of Chinese Poetry*”(柳無忌・羅郁正編、Garden City, New York: Anchor Books, 1975)と題されたアンソロジーが出た後だったとしたら、彼は自分自身の方角を變えなくてはならなかつたことだろう。劉若愚は長年自分が「母國語の讀者」であることの優位を論じてきたのに對して、インディアナ大學の二人の教授、柳無忌と羅郁正は二十人以上の「何年もことばの訓練を大學院で受けてきた若い研究者たち」を含む、多數の新たな翻譯者を巻き込もうと企てたのである。さらに、この活動の中心は、それまでこの領域を支配してきた沿岸地帯の研究施設から遙か離れた、アメリカ中西部(インディアナ大學)であつた。

ダニエル・ブライアント Daniel Bryant、ジョナサン・シ  
エーヴズ Jonathan Chaves、ロア・フゼック Lois Fueseck、  
チャールズ・ハートマン Charles Hartman、ポール・ク  
ロール Paul Kroll、リチャード・リン Richard Lynn、ウ  
イリアム・ニーハウザー William Nienhauser、ステイー  
ブン・オウウェン Stephen Owen、ジョフリー・ウォー  
ターズ Geoffrey Waters、ロビン・イエイツ Robin Yates  
を含むこれらの「若い研究者たち」は、いずれもその時点  
では出版した本はほとんどなく、そのうちにこの領域で名  
を成したのである（付載する文献目録が示すように）。翻譯に  
際して様々な文體を提示することが強調され、執筆者たち  
は自分自身の好みや文體に合った作者を選ぶように鼓舞さ  
れた。翻譯した詩ごとに、アジア基金による研究費から原  
稿料が支拂われた。これは「ひまわりの輝き」における詩  
の選び方が、少なくとも中國詩を學ぶアメリカの學生にと  
って、従来の傳統詩の集積、「母國語の讀者」にとつての  
従来の集積のかたちを變えることになった。しかしこれ以  
上に、「ひまわりの輝き」と一九七五年は結果としてアメ

リカにおける中國古典詩の研究に新しい時代を開くものとなつた。一つは、多くがその前の十年の中國人大學者から教えを受けている「若い研究者」、非母國語の讀者が優勢を占めるようになったことで、彼らは傳統的な大詩人についての探求を廣げ續けるとともに、手を廣げて貫雲石（一二八六—一三三四）、皮日休（八三三—八八三）、明清の詩人を掘り起こしていった。

この「新時代」に出版された最初の重要な書物は、傳統詩の非母國語讀者として最も名高い一人、ハンス・フランケルによるものであった。彼の『花咲くプラム、宮廷の女性、中國詩の解釋』“*The Flowering Plum and the Palace Lady, Interpretations of Chinese Poetry*” (New Haven: Yale University Press, 1976) は、表面上は中國古典詩百六首の翻譯であり、そのうちの五十首はそれまで一度も英語に譯されたことはなかった。しかしこの本のより重要なところは、これらの詩をいかに讀むかについてのハンドブックであることだ。著者は自分の目的は鑑賞を提示することであると言うが、結果としては百六の例を通して、中國詩をい

かに読み、いかに解釋するかを讀者に教えている。この點において、これはハンス・フランケル自身の「中國詩の技法」とみなすことができる。フランケルの配列が劉若愚の最初の本のやりかたと似ていることも、この主張と一致している。すなわち主題による分類（「人と自然」詩一―一一、「愛の詩」詩三五―四一、「過去の追想」詩六七―八〇）、そして技法による分類（「對句と對照法」詩八五―九二）。章ごとにその題目をめぐって全體的な導入を初めに置き（一、二のバラグラフによって）、翻譯と解釋が續く。原文は注に收められ、本はほかに批評的な構成はない。フランケルの本は自分で本を出版し始めていた若い研究者たちに多大な影響を與え、彼らに對する影響の點では、梅・高の同時期の研究に次ぐものであった。

同じ年にイェール大學のフランケルの同僚、ヒュー・ステイムソン Hugh Stimson は二巻からなる古典詩入門を公刊した。『唐詩五十五首——唐詩と唐詩の語彙を讀み理解するためのテキスト』“*Fifty-five Tang Poems, A Text in the Reading and Understanding of Tang Poetry and Tang*

*Poetic Vocabulary*” (New Haven: Far Eastern Publications, Yale University, 1976) である。中世中國語の音聲と文法についての説明に續いて、第一巻では初心者向けに五十五首の唐詩（王維十二首、李白・孟郊各九首、杜甫五首、ほかに數名の詩人の詩）を説明している。それぞれの詩の原文と中期中國語の音に書き換えられたものに逐語譯が續いている。詩型を述べたあと、ステイムソンは各句のシンタクスと特別な語彙に觸れている。各章は詩篇のあとで「韻律に關する注」（樂府などのジャンルを説明したり、平仄を記したり）が續く。廣い範圍にわたる用語集と基本的な文獻目錄がこの巻を完全なものにしている。用語集は丁寧に作られたもので、中世中國語を復元し、各語が五十五首のなかの一つの詩のなかでどのように使われているか説明している。（たとえば「服、drink、服従する 22. 104・〈藥を〉飲む 41. 6」）第二巻、『唐詩の語彙』は大きな潜在力を持っていた。そのなかでステイムソンは七百首の詩（『唐詩三百首』、高步瀛『唐宋詩舉要』の全詩、及びステイムソンが選んだ王維ほかの四十三首）にあらわれる語について百三十四ペー

ジの注解を書いている。問題はこの用語集が、第一巻と同じように細心の注意を拂って作られたものではあるが、元のテキストの語に合わず、明らかにその有用性を減じていることである。

『ひまわりの輝き』に集まった若い研究者たちによる最初の重要な研究は、イェール大學のハンス・フランケル、ヒュー・ステイムソンの學生であつたステイブン・オウウエンによるものである。こういうのが的外れでないのは、アメリカにおける中國古典詩の分野の大部分の學者が、中國詩の研究においてオウウエンをこの時代の大きな存在と認めているからである。オウウエンの『初唐詩』“*The Poetry of the Early T'ang*” (New Haven: Yale University Press, 1976) は唐詩の歴史(後述する『盛唐詩』も参照された)を追跡する二つ(讀者によつては三つ)<sup>⑭</sup>のうちの一つである。それはまた宮廷詩の傳統と「初唐詩がいかに宮廷詩から抜け出したか」(8頁)の研究でもある。一九七〇年代半ばにおいて、初唐詩は低く見られるのがあつたであつた。(それは傳統的な中國の評價に従つていたのだが、このこと

は『ひまわりの輝き』グループの「若い研究者たち」が既定の規範に挑戦する最初の例である。)オウウエンの本とその中國語への翻譯は、これらの詩人たちに對して新たな關心を引き起こした。その時代の二、三の非宮廷詩人(王績(五八五—六四四)など)は除いて、敘述は(一)「宮廷詩とその對立」(六世紀と七世紀早期の詩)から(二)「宮廷詩から離れて：六六〇年代と六七〇年代」(初唐四傑を中心とする)、(三)「陳子昂(六六一—七〇二)、(四)「武則天と中宗(六八〇—七〇二)の宮廷詩人たち」(杜審言(六四六—七〇八頃)など)、そして(五)「張說(六六七—七三一)と盛唐への移行」へと移る。そして有益な二つの節、「宮廷詩の文法」と「音聲の型」が付されている。

オウウエンのテーマは、宮廷詩は初期・中期七世紀に過度に様式化、文體化され、その反動として七世紀晩期のより緩やかな(偏向した)詩的因襲を生むことになった、というものだ。しかし彼は宮廷詩の「當初の目的は貴族社會の味わい深い稱揚であつた」(三八頁)のであり、折り折りの場で作られたこれらの詩の大部分は「規格に合つていて

もまったく獨創性に欠ける」(二七九頁)ものであったと記している。何百という詩(ほとんど毎ページに一首)を譯し、「規格に合っていないでも獨創的に欠ける」とあまりに頻繁に記した結果、劉若愚は「我々は劣ったとみなされる詩を提示されている。これは時々些末なことを扱っているという印象を与えることになる」とコメントしている。劉若愚の反應は、オウウエンの最初の本『孟郊と韓愈』(本稿第二部の考察を参照)に對する稱賛と明らかに異なり、三年後のこの二冊目の本によつて劉若愚の權威に對して「非母國語の讀者」の代表として挑戦していると劉若愚が感じたことを示している。劉若愚も記しているように、原文が翻譯ごとに付けられているとはいへ、使用するテキストはしばしば「數多くの材料から作り上げられている」というだけで、どのテキストを使っているのか、明示していない。しかしオウウエンに對しても公平にいえば、おびただしい翻譯の多くは、それ以前には西歐で知られていなかった詩人を深く洞察しているのである。

注

- ① "The Study of Chinese Literature in U. S., 1947-1987," Proceedings of the 40th Anniversary of Fulbright Cooperation between the ROC and the USA (Taipei: Pacific Cultural Foundation, 1988), pp 225-41.
- ② この時期には Ph. D. の比率が、中國文學の一に對して中國史では二十にのぼったという資料がある。
- ③ 夏教授はアメリカではイェール大學で、劉教授はハワイ大學で仕事を始めたものではあるが、それぞれコロンビア大學、スタンフォード大學における期間が最もよく知られている。こうして二人は、五十年代にブッドバーク教授とハイタワー教授によつて始められた東海岸・西海岸の二極構造を維持したのである。
- ④ 劉若愚「言語間批評—中國詩の解釋」"The Interlingual Critic, Interpreting Chinese Poetry" (Bloomington: Indiana University Press, 1982) の「序文」(xvii頁)を参照。
- ⑤ "Harvard Journal of Asiatic Studies," (以後' HJAS と略す) 24 (1964): 260 のハンス・フランケル Hans Frankel 書評。
- ⑥ それに續いて中國詩の酒を論じた最もすぐれたものの一つは、ヘルヴィッピ・シュミット・グリンツェル Helwig Schmidt-Glintzer の「中國文學における酒と飲酒のテーマについて」"Zum Thema Wein und Trunkenheit in der Chinesis-



chen Literatur" Zeitschrift der Deutschen Morgenlandischen Gesellschaft, Supplement v (1983): 469-81 である。

- ⑦ 時に劉若愚はこの問題に關して鬭争心をむき出しにするところがある。ギュンター・デボンの書評に對する反論 ("Journal of the American Oriental Society" 以後 JAOs と略す) 84 (1964): 172-3) を参照。

- ⑧ この本に關する書評の中で名高いものとしては、ギュンター・デボン Gunther Debon、ハンス・H・フランケル Hans H. Frankel、デイヴィッド・ホークス David Hawkes、ジュームズ・ロバート・ハイタワー James Robert Hightower が挙げられよう。

- ⑨ " " は私のつけたもの。この書評は "Journal of Asian Studies" (以後 JAS と略す) 23 (1963): 301-2 に見える。

- ⑩ 次に論ずる柳無名の「中國文學入門」は抜粋したものであり、劉若愚が注目すべきと考える、少なくとも三つの問題を除外していることを柳自身が認めている。(序文 vii 頁参照)

- ⑪ 私の知る限り、これは英語における散曲の最初の綿密な研究である。

- ⑫ ハートマンの學位論文「韓愈の詩におけることばと引喩」・「秋懷」"Language and Allusion in the Poetry of Han Yü. The 'Autumn Sentiments'" (Indiana University, 1974) と「韓愈と唐代の統一の探求」(後述)、オウウエンの「孟郊と

韓愈の詩」(本稿第二部参照)・劉若愚「李商隱の詩——九世紀バロックの中國詩」(第二部参照)のみならず、オウウエンの「枯木——庾信から韓愈に至る枯れた木」"Deadwood: The Barren Tree from Yu Hsin to Han Yü" CLEAR (1979) 157-179 にも私は考えつづる。

- ⑬ アメリカの研究の中でグラハムの本の位置づけ、早期の學界における孤立性、そして劉若愚が一九六〇年代後期における古典詩研究の頂點に立っていたことについては、この本についての劉若愚の書評、JAOs 86 (1966) 330-333 頁が示している。

- ⑭ 「文林——中國の人間性の研究」第二巻も周策縱の編集であり、何年か遅れて、一九八九年に出版された。(同じく Madison: Department of East Asian Languages, University of Wisconsin and Hong Kong: Institute of Chinese Studies, Chinese University of Hong Kong)。周の「序文」(vii 頁)を参照。

- ⑮ この五種のカテゴリリーは唐以前の樂府にのみあてはまる。 فرانケルが記している(七〇頁)ように、唐代では新樂府が起り、樂府ということばはのちに多くのタイプの歌に用いられるようになる。

- ⑯ 「この時代」とは、一九七六年から一九九六年までの二十年間を指す。

- ⑰ 中唐詩の研究でもあるオウウエンの最初の本「孟郊と韓愈

の詩』（本稿第一部參照）、また彼の『中國の“中世”の終焉——中唐の文學・文化論』（後述）は、著者が否定するにもかかわらず、中唐の歴史的な考察の開始となるものと記している研究者が多い。

- ⑬ 劉若愚の『初唐詩』に對する書評、JAS 38 (1978): 168-169。

譯注

- ① この本は佐藤保氏によって邦譯されている。『新しい漢詩鑑賞法』（一九七二、大修館書店）。
- ② 第一部下（次號）の末尾に付載。
- ③ この三編の論文は一冊にまとめられて中國語譯が刊行されている。高友工・梅祖麟『唐詩的魅力』（李世耀譯、武菲校、一九八九、上海古籍出版社）。

（川合康三譯）